



審査を終えて

第四十一回展 大会審査部長

加藤 東陽

第四十一回高円宮杯日本武道館書写道大展覧会は、全国から毛筆の部一万三千六百一点、硬筆の部七千二百四十六点、合計二万八千四百七十七点の出品がありました。

審査は、六月二十九日、日本武道館第一・第二小道場において、毛筆の部、硬筆の部とも、学習指導要領に準拠することを確認し合い、二十九名の審査委員によって厳正かつ公平に行われました。その結果、高円宮賞に鈴木美結さん、内閣総理大臣賞に山本麗乃さんをはじめ、各賞を決定いたしました。

受賞された皆様に、心よりお祝い申し上げます。また、毛筆の部、硬筆の部ともに、上位の賞は決選投票によって決定するなど、出品者の皆さんの実力伯仲を強く感じました。

次に、今回の審査に当たって各部の感想を申し上げます。

幼児・小学生の部は、今年も全国各地からの出品があり、各学年それぞれ素直で元気な声が聞こえてくる作品が多く、一点一画に全国の皆さんが一生懸命努力している姿が心に残りました。

中学生の部では、行書作品で字形・筆づかい、全体構成などに留意して、全学年にわたり質の高い作品が多くあり、感心いたしました。特に学年が進むに従ってレベルの向上が見られ、完成度の高まりを感じました。

高校生の部では、今年も漢字や仮名作品において創作よりも臨書が多くありました。特に臨書では、レベルの向上とともに集中力など方向性として自分を見つめた個性豊かな「私の履歴書」としての作品が多く見られたことは、喜ばしい傾向の一つでした。

大学・一般の部では、今年は臨書作品よりも創作作品の出品が増えたことは大変よかったですと思います。表現内容も豊かになり、じつと見ていると書いた人の充実感が伝わってくるレベルの高い作品が増えてきたことは、今年の特色の一つと言えます。

今年も高齢者では九十四歳を筆頭に四十九名、外国（日本在住の外国籍の方を含む）からは百九十一名、特別支援学校等からは十三名の出品がありました。それぞれに自分の心の表出と筆を一体化させる真摯な姿に、大変心打たれました。

結びとなりますが、今、書道のユネスコ無形文化遺産への登録・実現（来年十一月頃）が注目されています。こうした状況を鑑みて、本展覧会が文字文化を大切にして、ますます充実発展して参りますよう、皆様の一層のご支援とご協力をお願いし、講評いたします。